

わたくしはいすに腰こしをかけてから、うす暗い石油ランプの光にてらされた、いんきな部屋の中を見まわしました。

ミスラ君の部屋はしつそな西洋間で、まん中にテエブルが一つ、かべぎわに手ごろな書だなが一つ、それからまどの前に机が一つ——ほかにはただわれわれの腰をかける、いすがならんでいるだけです。しかもそのいすや机が、みんなふるぼけたものばかりで、ふちへ赤く花もようをおりだした、はでなテエブルかけでさえ、いまにも、ずたずたにさけるかと思っうほど、糸目があらわになっていました。

わたくしたちはあいさつをすませてから、しばらくは外の竹やぶにふる雨の音をきくともなくきいていましたが、やがてまたあの召使いのおばあさんが、紅茶の道具をもってはいつてくると、ミスラ君は葉巻の箱のふたをあけて、

「どうです。一本。」

とすすめてくれました。

「ありがとうございます。」

わたくしは、えんりよなく葉巻を一本とって、マッチの火をうつしながら、

「たしかあなたのおつかいになる精霊せいれいは、ジンとかいう名前でしたね。するとこれからわたくしが拝見する魔術まじつというのも、そのジンの力をかりてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにやわらいながら、にのいけむりのいい煙けむりをはいて、

「ジンなどという精霊があると思つたのは、もう何百年もむかしのことです。アラビヤ夜話の時代のことでもいいでしょうか。わたくしがハッサン・カンからまなんだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。たかが進歩さいみんじゆつした催眠術さいみんじゆつにすぎないのですから。——ごらんなさい。この手を持た、こうしさえすればいいのです。」

ミスラ君は手をあげて、二、三度わたくしの目の前へ三角形のようなものをえがきましたが、やがてそのテエブルの上へやると、ふちへ赤くおりだしたもようの花をつまみあげました。わたくしはびっくりして、思わずいすをずりよせながら、よくよくその花をながめました。たしかにそれは今の今まで、テエブルかけの中にあつた花もようの一つにちがいません。

が、ミスラ君がその花をわたくしの鼻の先へもつてくると、ちようどじやこうかなにかのような重苦しいにおいさをするのです。わたくしはあまりのふしぎさに、何度も感嘆かんとんの声をもらしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、またむぞうさにその花をテエブルかけの上へ落しました。もちろん落すともとの通り、花はおりだしたもようになつて、つまみ上げるところか、花びら一つ自由には動かせなくなつてしまふのです。

「どうです。わけはないでしょう。こんどは、このランプをごらんなさい。」

ミスラ君はこういいながら、ちよいとテエブルの上のランプをおきなおしましたが、そのひょう